

研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学芸術文化学部・芸術文化学科
- ・所属ゼミ 藪谷研究室
- ・指導教員 藪谷祐介
- ・代表学生 重山隼人
- ・参加学生 今泉優希、栗原稜、北島陽貴、有原千尋

【研究題目】 食で多世代をつなぐ、地域コミュニティの創出-畑と屋台を用いた協働を通して-

1. 課題解決策の要約

高岡市吉久(以下、吉久)では多世代が交流できる地域コミュニティが少ないことや空き地が多いことが課題である。

吉久では、家庭菜園や畑作業を行っている人が多いことや、毎月第3日曜日に開催されている朝市で、飲食系が賑わいを見せていることに着目し、多世代の地域コミュニティの創出と空き地活用の課題解決策として、空き地を活用した「食」の多世代交流プログラム(以下、本プログラム)の提案を行おうと考えた。「食」が多世代をつなぐという仮説のもと、空き地を活用した畑での園芸作業を協働で行い、育てた作物をまちなかで振る舞える屋台を活用することで、多世代をつなぐ地域コミュニティが創出できると考えた。また、本研究では食べ物に関わる行為も「食」と捉え、園芸、調理、飲食、振舞、工作の5つを「食」と定義した。

2. 調査研究の目的

本プログラムの実践により、多世代をつなぐ方法としての有効性を検証し、新たな、空き地を活用した多世代交流プログラムとして提案することを本研究の目的とする。

3. 調査研究の内容

吉久に所在する、地域住民所有の空き地を「よしひさえん」と命名した。主として、その「よしひさえん」を対象に、本プログラムを実践する。期間は2022年6月から11月までである。本プログラムは5回のイベントと、2回の運営活動で構成される。5回目のイベントである、出張朝市に関しては重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建)にある住民所有のカーポートで活動を行った。本プログラムの概要を以下の表1に示す。

表1 本プログラムの実施概要

活動形態	イベント	イベント	運営活動	運営活動	イベント	イベント	イベント
タイトル	レイズドベッド制作・苗植え	レイズドベッド制作・収穫	土運び	草刈り	園芸バーベキュー	よしひさえんにち	出張朝市
食の種類	園芸、工作	園芸、工作	園芸	園芸	園芸、調理、飲食、振舞	園芸、調理、飲食、振舞、工作	調理、飲食、振舞
会期	2022年6月11日(土)	2022年7月31日(日)	2022年8月2日(火)	2022年9月7日(水)	2022年9月17日(土)	2022年10月30日(日)	2022年11月20日(日)
時間	10:00~12:00	10:00~12:00	9:00~12:00	9:00~11:00	10:00~15:30	13:30~17:00	9:00~10:00
参加	無料/ 途中参加・退出可	無料/ 途中参加・退出可	無料/ 途中参加・退出可	無料/ 途中参加・退出可	中学生以上500円 /途中参加・退出可	無料/ 途中参加・退出可	無料/ 途中参加・退出可
アンケート	有	有	なし	なし	有	有	なし

なお、効果検証は、本プログラムのイベント参加者を対象としたアンケート調査と、アンケート回答者の中から調査協力を得られた8名へのヒアリング調査から行う。

4. 調査研究の成果

4-1. 園芸

園芸では、野菜の苗植えや種まき、収穫などを行った。子どもが進んで苗を植える姿や、野菜作りの経験がある高齢の参加者が子ども達に植え方を教えるなど積極的な交流がみられた。芋掘りでは、子どもからお年寄りまでが協力しながらサツマイモを掘る姿や、夢中で掘る子ども達の姿が見られた。園芸活動を通して多世代が楽しみながら作業できる空間となっていた(写真1)。



写真1 園芸の活動風景

4-2. 調理

調理では、バーベキューで肉や野菜を焼く工程や、サツマイモを洗ったり、包んだりする工程を行った。焼きながら周りの参加者と楽しく会話する様子がみられた。サツマイモの調理では、二組の親子が役割を分担しながら、調理を行う様子がみられた。また、出張朝市では、屋台で販売用のスープを温めていたことをきっかけに高齢者と会話することができた(写真2)。



写真2 調理の活動風景

4-3. 飲食

飲食では、バーベキューや焼き芋、出張朝市での料理販売を通して参加者との共食を行った。参加者が持ち寄った料理や、よしひさえんで収穫した野菜を使った料理をみんなで楽しく会話をしながら食べる様子がみられた。共食では、多世代が年齢差関係なく楽しめる空間となっていた(写真3)。



写真3 飲食の活動風景

4-4. 振舞

振舞では、園芸バーベキューにて、参加者が、得意料理や家で採れた野菜、好きな食材や飲み物など、様々な食べ物を持ち寄り、他の参加者に振る舞う様子がみられた。振る舞われたものをきっかけに会話が盛り上がり、年齢差関係なく、楽しむ様子もみられた。よしひさえんにちでは、屋台を囲んで談笑する様子や、元家具職人による、カンナがけのレクチャーが行われた。また、出張朝市でも、地域住民と屋台での販売や共食を通したコミュニケーションをとることができた(写真4)。



写真4 振舞の活動風景

4-5. 工作

工作では、レイズドベッド制作やベンチづくりを行った。工具の使い方や上手くビスを入れるコツを知っている参加者がおり、他の参加者に教えるなどの交流がみられた。また、親子で協力しながら組み立てる様子がみられた。誰でも取り組める共同工作を行うことによって、多世代交流が促進されていた(写真5)。



写真5 工作の活動風景

4-6. アンケート・ヒアリング調査結果

写真などの記録から、本プログラムに 1 回以上参加したことのある人は 41 名であった。特によしひさえんにちでは、空き地に 31 名もの参加者が集まるという成果を残すことができた。

表 2 本プログラムの参加者数

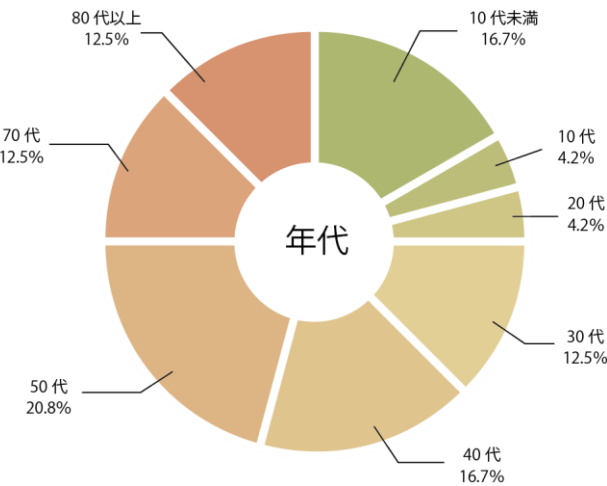
参加者番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	計
タイトル	レイズドベッド制作・虫縁え	●	●			●	●																																				13
	レイズドベッド制作・収穫	●	●			●		●	●	●			●	●	●																												11
	土運び						●	●								●	●		●	●																							7
	草刈り						●	●								●	●		●	●																							7
	園芸バーベキュー	●	●					●					●	●			●	●		●	●			●																			12
	よしひさえんにち	●	●	●	●		●				●	●	●			●	●		●	●			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	31
	出張朝市						●									●																							●	●	●	●	6

また、総合的なアンケート結果として、参加者の年代を参照すると、60 代を除き、10 代未満から 80 代以上まで、参加者がいることから、年代を問わず幅広い年齢層から参加があったことがわかった。

幅広い年代に空き地での「食」を通した交流が体験できていたことは、成果であるといえる。

表 3 年代

年代	n	%
10代未満	4	16.7%
10代	1	4.2%
20代	1	4.2%
30代	3	12.5%
40代	4	16.7%
50代	5	20.8%
60代	0	0.0%
70代	3	12.5%
80代以上	3	12.5%
計	24	100%



さらに、アンケートの記述回答には本プログラムを通して、地域の人と交流できたことを評価する意見が多く見られた。また「幅広い年齢層が参加し交流しているところが良かった」という意見もみられ、本プログラムが幅広い年齢層の参加・交流を促進していたことは成果であるといえる。また、「今まで、あまり話したことのない人と話せた」という記述もあり、本プログラムが、新たな人とのつながりを創出する可能性が示唆された。

ヒアリング調査結果をもとに、本プログラムで、構築された人とのつながりを図 2 に示す。他の参加者との交流状態は「初めて見た人と交流した」、「知人と交流した」、「初めて見た人」という 3 種類で分類した。なお、年代を 3 つの年齢層に分類した。若年層は 40 代未満、壮年層は 40 代以上 70 代未満、高齢層は 70 代以上である。図 2 より、ヒアリング対象者のすべてが、自分以外の年齢層の人と交流もしくは初めて見た人と出会う機会を得ていることがわかった。このことから、本プログラムによって多世代のネットワークが構築されたことがわかった。また、ヒアリング対象者の「初めて見た人と交流した」、「初めて見た人」の人数を整理したところ、表 4 のようになった。ここから、本プログラムの交流実態に着目すると、同じ年齢層での新たな出会いや交流があまり見られなかった一方で、異なる年齢層での新たな出会いや交流はある程度多く見られたことがわかった。このことから吉久では同じ年齢層での交流や活動は既にある一方で、異なる年齢層での交流や活動はあまりないことが推察される。本プログラムで初めて見た人の間での多世代交流がみられたことから、本プログラムは今後、多世代のつながりを形成するきっかけになることが示唆された。

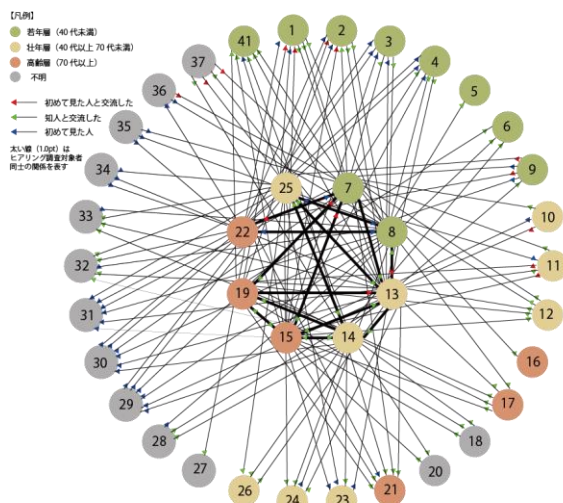


図2 ヒアリング対象者の本プログラムによるネットワーク

表4 ヒアリング対象者の交流実態

氏名	年齢層	初めて見た人と交流した				初めて見た人			
		若年層	壮年層	高齢層	不明	若年層	壮年層	高齢層	不明
7	若年層	0	0	1	1	1	0	0	4
8	若年層	0	1	0	1	1	4	1	8
13	壮年層	0	1	0	0	2	0	0	4
14	壮年層	0	0	0	0	0	0	0	3
25	壮年層	1	0	0	1	5	1	0	4
15	壮年層	3	1	0	0	2	1	0	0
19	高齢層	3	2	0	0	0	0	0	0
22	高齢層	0	0	0	0	7	1	1	6

また、「もともと家があって空き地になって、打ち捨てられた感じの場所というネガティブなイメージがあったが、随分と関係がでて、愛着がわいた」など、活動を通して愛着がわいたという意見を、一定数確認できた。ネガティブなイメージがあったり、普段の生活では行ったりしなかった空き地に、愛着を持つようになり、多世代が集い、楽しく過ごせる空間になっていたことは、本プログラムを実施した成果である。

4-7. モバイル屋台「えん」

本研究では、リアカーを使用した屋台を制作した。リアカーについては、地域で廃棄処分予定だったものを使用することができた。また、屋台を囲んで座れるためのスツールも制作した。よしひさえんとまちなかを移動できる、モバイル屋台「えん」によって、空き地と重伝建、人と人をつなぐことができた。以下に本研究で制作した屋台の組立てによって形が変化していく様子を示す(写真6)。



写真6 モバイル屋台「えん」の組立手順

5. 調査研究に基づく提言

本研究では、新たな空き地を活用した多世代交流プログラムとして提案することを目的に、プログラムの実践と多世代をつなぐ方法としての有効性の検証をアンケート調査とヒアリング調査によって行った。それによって得られた結論は以下のようである。

アンケート調査の結果から、小さな子どもからお年寄りまで幅広い年代の参加・交流がみられ、多様な人の参加・交流機会を創出ただけでなく、参加・交流を促進する効果があることが明らかになった。また、新たな人とのコミュニケーションをとる機会にもなり、本プログラムが、新たな人とのつながりを創出する可能性も示唆された。

ヒアリング調査の結果からヒアリング対象者のすべてが、自分以外の年齢層の人と交流もしくは初めて見た人と出会う機会を得ていることから、本プログラムによって多世代のつながりが形成されたことがわかった。また、本プログラムで初めて見た人の間での多世代交流がみられたことから、本プログラムは今後、多世代のつながりを形成するきっかけになることが示唆された。また、ヒアリング調査で、よしひさえんに愛着がわいたという意見が一定数確認できたことから、本プログラムが、空き地の愛着形成を促し、空き地活用への効果が示唆された。

これらのことから、本プログラムは多世代をつなぐ方法として効果があり、多世代の地域コミュニティが創出されたと考えられる。増加していく可能性のある空き地を、個人で管理していくのではなく、まちの所有物として、地域住民全体で利活用しながら、管理をしていくことが重要であると考ええる。そのうえで、「食」を用いた活動は空き地活用や、多世代の地域コミュニティの創出に有効であると考ええる。

6. 課題解決策の自己評価

本研究では、本プログラムの実践により、多世代をつなぐ方法としての有効性をアンケート調査やヒアリング調査によって検証できた。また、吉久に数多くある空き地への展開できる可能性もあり、本プログラムが空き地を活用した多世代交流プログラムのモデルとして提案できると考える。今後は、活動を継続していくことに加え、イベントではない日常的な、よしひさえんの利用や管理に住民が参加できる仕組みを取り入れることによって、さらに多世代の地域コミュニティへと発展させていくことが重要である。

【謝辞】

本研究は、「大学コンソーシアム富山の学生による地域フィールドワーク研究助成事業」を受け実施した。本プログラムの参加者の皆さま、アンケート調査やヒアリング調査にご協力してくださった皆さま、吉久まちづくり推進協議会、NPO 法人吉久みらいプロジェクト、吉久の住民の方々、そして、実践や調査に協力した藪谷研究室の仲間に感謝の意を表する。